

【報告】

アフリカの大地を走る「シマウマ号」  
— ボツワナの移動博物館サービス —

“Zebra on Wheels” running on the African Continent  
— Mobile Museum Service in Botswana —

菊池 弥生\*

Yayoi KIKUCHI

**Abstract:**

The Botswana National Museum, Monuments and Art Gallery has established a very effective outreach programme popularly known as “Zebra on Wheels”. This programme was begun in 1979. Initial funding for this Mobile Museum Project came from UNICEF, and later SIDA took over the responsibility for funding the project. However, the project has been funded entirely by the Government of Botswana since 1997. Its annual budget is around 2 million Yen.

The target audiences are primary school pupils in the rural areas and villagers in the communities who have no access to the resources in the museum. Every year around 100 primary schools are visited by the Mobile Museum. Approximately 87,000 pupils participate in the programme annually.

The programme includes about diversity of ethnic groups and their environment etc. in Botswana. An education curator, a museum assistant, a driver in total three staff are normally involved in the programme.

It could be said that the Zebra programme has a role promoting museum education in the rural areas and also is one of the excellent examples of the successful outreach programme in Africa.

---

\*古代オリエント博物館非常勤研究員

平成16年11月30日受理

## 1. はじめに

2000年から2003年まで、筆者は東アフリカにあるケニア共和国（以下、ケニア）（図1）にあるケニア国立博物館で働いていた。ケニアには博物館が全国にわずか17館しかなく、地理的・経済的・交通手段などの問題により、博物館を訪れる機会のない学校グループや国民が大勢いる。つまり、ケニアに限らず、アフリカ諸国には博物館の存在そのものを知らない人々もおり、博物館が出張するアウトリーチが有効であるという議論が活発化していた。そのため、アウトリーチ・プログラムと車両を利用した移動博物館の開発に取り組んだ。

一方で、南部アフリカのボツワナ共和国（以下、ボツワナ）（図1）では、移動博物館の原点ともいえる独自方法を採用しているという報告書を入手し、アフリカ大陸という共通性のあるボツワナにおいて、移動博物館の技術移転研修を計画した。ケニアに効果的な移動博物館を導入するため、その成功例の調査と実施方法の確立を目標にしていた。ケニア国立博物館の教育部長、視聴覚部長、筆者の3名は、ボツワナ国立博物館の移動博物館「シマウマ号」に同行するため、2001年9月16日から26日まで、首都のハボロネを訪問した。



図1 ケニアとボツワナの位置

ボツワナに関する一般的な印象は、「ブッシュマン」の住む「カラハリ砂漠」の国だろう。しかし、ブッシュマンは白人が名付けた蔑称とされ、「サン人」の名称が用いられる。1960年代までのボツワナは、アフリカの国々の中でも最も貧しい国の一つであり、イギリスから独立したのは1966年であった。ところが、1967年にカラハリ砂漠でダイヤモンドが発見されて以来、年間経済成長率は世界一という急激な発展を遂げており、その他の鉱物資源にも恵まれた豊かな国として知られるようになった。反面、エイズ患者の死亡率が世界最高という嬉しくない統計があり、国家にとって思わぬ就業人口の不足に見舞われている。

## 2. 移動博物館の歴史

研修目的に掲げた移動博物館は、広義ではアウトリーチの一部に分類され、学校向け出張授業や貸し出しサービスあるいは地域サービスも含まれる。従って、アウトリーチは対象者と対象地域が博物館から遠距離にある場合や、人々が博物館を訪れることが出来ない場合には、非常に有効な手段となる（Hooper-Greenhill 1991）。移動博物館は、大型トラックに博物館資料と展示品を積み込み、博物館母体からその一部を地方の学校あるいは田舎の村民に持参できる。これらは特に国土面積の広大な国や大都市の下町地域に有効である（Ambrose and Paine 1993）。

そのアウトリーチ活動の一環である移動博物館の歴史をみると、1970年代初め、まずアメリカにおいて開始された。1974年、インドでもこの事業が始められており、イギリスには1979年に導入されている (Hooper-Greenhill 1991)。ボツワナでも、1979年にユニセフからの援助により、移動博物館プロジェクトが開始された (Bauman 1998)。つまり、ボツワナはイギリスと同年に移動博物館を開始しており、アフリカ大陸のみならず、国際的にも古い歴史を持つ草分け的な存在と位置付けられる。近頃の日本でもこれを導入する博物館が増えてきており (近藤 2000)、他の諸外国の例として、カナダ、オーストラリアとスウェーデンでは博物館列車を運行している (Ambrose and Paine 1993)。また、ボツワナに隣接するザンビアとナミビアでも実施しているという報告がある (Hooper-Greenhill 1991; Museum International 1996)。

フーパーグリーンヒルによると、

イギリスの移動博物館は、観客が車で牽引した移動住宅用のトレーラーに入り、内部の展示品を見学する方式である。その目的は、貧困地区の学校と働き、文化設備の不足を緩和しようという試みから出発していた。一方、アメリカでは、当時からコンピューターを搭載した車両を利用しており、博物館教師を派遣する学校向けハンズ・オン授業と小規模展示会を開催していた。他方、インドの移動博物館は、イギリスの車両とは相違しており、展示物はトラックの内側と外側から眺められる工夫があった。また、対象者も学校だけではなく、一般市民向けにも計画されていた。(Hooper-Greenhill 1991)

1970年代におけるボツワナとアメリカ、インド、イギリスを比較すると (図 2)、ボツワナ

年代	国名	車両形式	搭載物	内容	対象	支援団体
1970～ 1974	アメリカ	トラック (運搬用)	コンピューター 博物館資料	プログラム ハンズ・オン 小展示会	学校	企業 受講者
1974	インド	トラック (内部・外部に展示室)	展示された 博物館資料	展示会	学校 市民	政府
1979	イギリス	移動住宅用トレーラー トラック (共に内部に展示室)	展示された 博物館資料	展示会 プログラム	市内学校 貧困地区学校	政府 企業
1979	ボツワナ	四輪駆動車 (運搬用)	博物館資料 視聴覚機材 発電機 寝具 調理用品	プログラム ハンズ・オン 小展示会 映写会 文化交流	田舎の小学校 田舎の住民	ユニセフ SIDA

(Hooper-Greenhill の *Museum and Gallery Education* から抜粋のまとめ)

図 2 1970年代の初期移動博物館の比較

の車両は、悪路でも馬力を発揮する中型の四輪駆動車を使用している。車両は必要機材と資料の運搬専用で使用されており、内部展示は一切ない。博物館職員を学校に派遣してハンズ・オン授業と展示を行っていることから、車両の利用方法と内容面では、およそアメリカ方式といえる。しかし、対象地域と対象者は、ボツワナ全土の博物館から遠い田舎の学校や地域住民と働くことであり、これは学校と国民への社会教育を兼ねたインド方式に類似している。その上、ボツワナは生活用品一式までも持参しており、同年代のアメリカ・イギリス・インドとは異なる独特なボツワナ方式を発展させたといえる。

### 3. ボツワナ移動博物館プロジェクトの誕生

1979年、ボツワナ国立博物館において、ボツワナ移動博物館プロジェクトはユニセフからの助成金により実現した。その後、スウェーデンのSIDA (Swedish International Development Agency) が支援を継続していたが、1997年からは完全にボツワナ政府によって運営されている。ボツワナの移動博物館であるPitse ya Naga mo Maotwaneng (Zebra on Wheels) は、ボツワナ国立博物館の所有する四輪駆動車を改装した特別車両名である。公用語のセツワナ語で「車輪付きのシマウマ」を意味し、日本語では「シマウマ号」と呼べる。(図3) その命名の由来になったシマウマは、ボツワナの国章に採用されており、国民や子供たちに最も親しまれている動物である。



図3 移動博物館「シマウマ号」

ボツワナにおける移動博物館のはじまりには、同国の諸条件が関連している。例えば、国土面積は日本のおよそ1.5倍だが、半乾燥地帯が大部分を占め、人口は160万人と極端に人口密度が低い。しかし、博物館は全国に7館のみであり、そのほとんどが大都市に限られている。首都にあるハボロネの国立博物館を訪問する機会は期待出来ず、博物館総数・博物館までの遠大な距離・国土の広さを考慮すると、博物館によるアウトリーチの必要性とその重要性が理解

出来る。そのため、田舎に住む子供たちを優先するアウトリーチ・プロジェクトが企画され、同時にプログラムは学習指導要領を補足するように構成された。縞々模様の車体に塗り替えられた1台の四輪駆動車で開始されたが、現在は3台の車両を所有している。

### 4. 「シマウマ号」のプログラム

通常「シマウマ号」の専任職員は、教育担当者、補助職員、運転手の3名で役割分担をしている。教育担当者は、プログラムの企画・学校への連絡・講義資料の準備・講義の実施・新情

報の収集・報告書の作成の責任者である。補助職員は、「博物館教室」での展示・実演授業・住民との文化交流を担当する。運転手は、視聴覚機材係として教室内での準備と上映を行い、更に食事係も兼任している。

「シマウマ号」の準備として、前日までに車両の整備と積み荷を完了する。(図4) 必要資料および機材として、①ハンズ・オン用の民族資料および展示資料(図5) ②講義用の資料③ビデオ・プロジェクターおよびスクリーン④講義に関連するビデオ・テープ⑤評価表⑥発電機⑦寝具⑧調理用品などを積み込む。最後に、⑨食糧品の買出しは、冷蔵庫を所有していないため、主に缶詰類や乾物であり、野菜や肉類は現地調達をしている。



図4 「シマウマ号」に積載された荷物

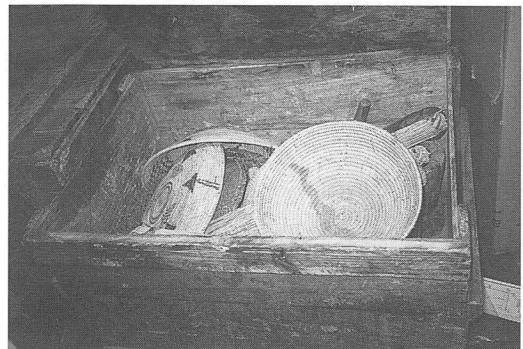


図5 箱詰めされた民族学資料

「シマウマ号」が訪問する小学校(図6)は、博物館に対して4教室を提供しなければならない。それらは、①講義用②展示とハンズ・オン用③視聴覚教育用④博物館職員のための宿泊用として使用される。学校向け博物館教育の対象は、中学生よりも年齢の低い小学生が効果的であり、また小学校は授業時間にも余裕があると判断された。

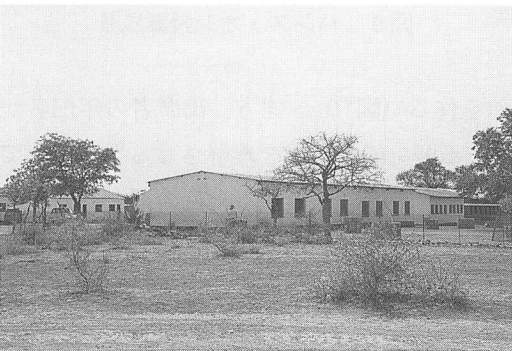


図6 田舎の小学校

対象者は、田舎の小学校児童である。同時に、子供たちの家族や学校周辺の村民も含まれる。小学校課程在学中、最低1度は移動博物館を経験するように考慮している。1回の移動博物館の日程は、土・日を除く3週間から4週間の期間を目処にして、15校から20校の小学校を訪問する。その結果、訪問する学校総数は、年間およそ100校になり、約87,000名の児童が移動博物館の恩恵を受けている。(Bauman 1998)

移動博物館プログラムは、早朝から夜10時頃までの終日授業になる。(図7)

午前の部は、低学年と高学年にグループ分けし、博物館の目的と仕事が紹介される。次に、

時間	場所	内容	対象
午前の部	講義教室	博物館の紹介 ボツワナの民族 環境教育	小学生 (1年生～4年生) (5年生～7年生)
	博物館教室	展示 ハンズ・オン	
	視聴覚教室	ビデオ鑑賞	
午後の部	校庭	文化交流	小学生・教員・ 父兄・地域村民
夜の部	校庭	映写会	地域村民

図7 「シマウマ号」のプログラム

場合がある。午後の文化プログラムには、父兄や村人も招待される。子供たちは家庭から持参した珍しい衣装・古い家具・宝物を説明するなど、ボツワナ版「何でも鑑定団」のような雰囲気

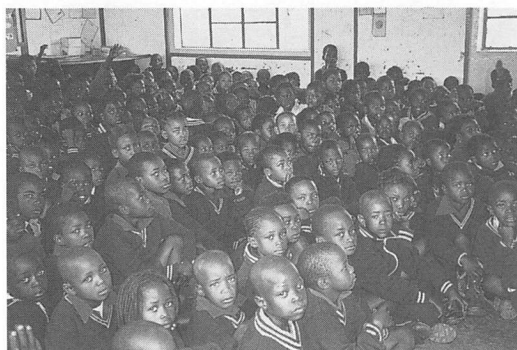


図8 教室いっぱいの小学生たち

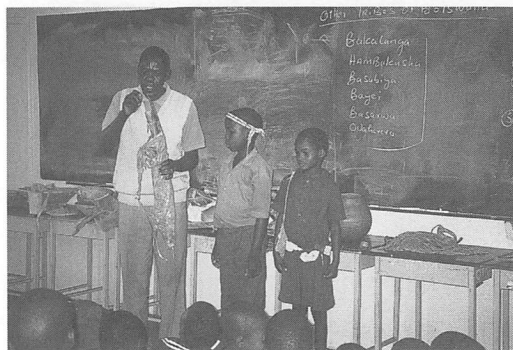


図9 ハンズ・オン授業風景

気になる。学校によっては、即席の野外ミニ博物館を作る（図10）。他方、出席者の年配者が昔話を語ることにより、文字文化以外の口承伝承による歴史的な意義を理解させる努力をしている。全員で合唱してダンスを踊り（図11）、自分たちの文化を祝福する。夜の部として、校庭において村民を対象にした映画が上映される。多文化の理解や環境問題などに関して、地域住民に共通話題を提供するという意図がある。参加人数に比較して、博物館所有のスクリーンは小型で見えにくいのが、村民に対する生涯学習の場と捉えられる。

ボツワナ博物館は、この「シマウマ号」の実施により、以下の事項を到達目標にしている。

- ①博物館の働きを理解する。②ボツワナ国内の多民族性を知る。③文化と自然環境との関係を理解する。
- ④口承伝承の重要性と発表技術を養う。⑤独自の文化と伝統習慣を理解する。⑥伝統文化祝典への参加経

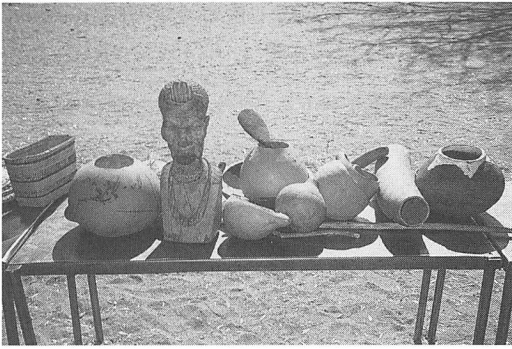


図10 野外ミニ展示（器類）



図11 ダンスをする女子学生たち

験を培う。⑦地域遺産と文化について、両親や年長者から学習する自覚を促す。(Bauman 1998)

「シマウマ号」の評価は、小学校教員に評価表を配布し、記入後に郵送という方法を採用している。そこから得た助言や問題点をまとめ、プログラムの改善に役立たせる。また、担当者はプログラムに対する反応や自己採点を行い、報告書を教育部長に提出している。

## 5. 「シマウマ号」開催中の生活

研修の際、首都のハポロネから北東700キロの地域を目指した。目的地までは、休憩時間を入れると8時間以上の長旅になる。殺風景な赤茶けた半砂漠が続くが、道路は舗装されたアスファルトである。しかし、地方の学校周辺はブッシュで道がない場合が多く、ボツワナでは四輪駆動車が不可欠となる。「シマウマ号」の一日の始まりは早い。早朝5時に起床し、6時半には荷物をまとめて出発する。訪問する小学校までの距離で多少の差はあるが、7時半頃には到着した。ボツワナの小学校は朝6時45分に始まり、12時半に終了するのは、昼が猛暑という気候条件に関係している。博物館職員は、学校長と教員に挨拶を行い、教室への展示や視聴覚機材の準備をし、午前8時半頃にプログラムを開始した。

博物館職員の宿泊地を学校にした理由は、田舎には宿泊施設がなく、食事をするレストラン

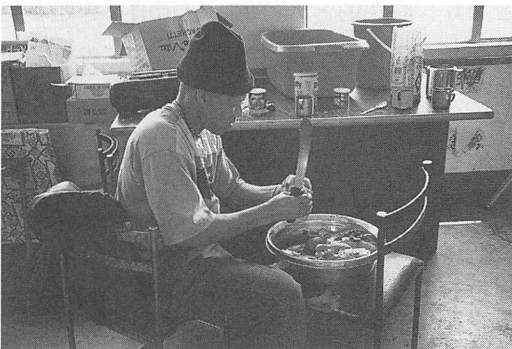


図12 料理をする運転手

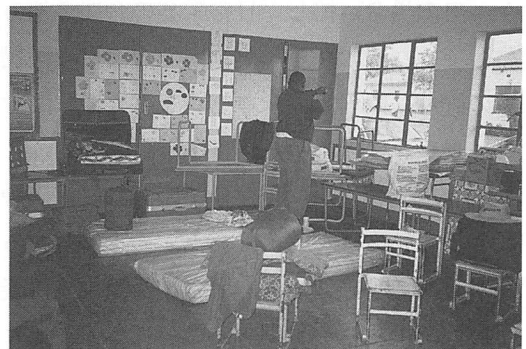


図13 ホテル代わりの教室

---

もないという背景があった。教室内には電気がなく、夜はランプと懐中電灯が必需品になる。小学生の机と椅子を借用して、台所（図12）や居間にするが、夜はマットや寝袋を敷いて就寝する（図13）。仕切りのない大部屋での寝食には、様々な不便が伴い、マラリアを運ぶ蚊の駆除と共にシャワーが問題であった。男性職員は屋外で水浴びをし、女性職員は教員官舎の風呂を借用している。移動博物館の実施には、生活面においてもチームワークと柔軟な適応力が要求される。

## 6. 「シマウマ号」成功の秘訣

ボツワナで移動博物館が開始されたのはおよそ25年前であり、ボツワナ博物館の報告書には「外国からいろいろな考えや方法が紹介され、教育担当者が申請書を作成した。」（Bauman 1998）とある。この時期における車両を利用した移動博物館は、欧米諸国で本格化し始めた概念といえる。当時の国際情勢に詳しいユニセフ職員か欧米人が博物館に提案して、両者が協力したと考えるのが妥当であろう。援助を申し出たユニセフの英断と受け入れたボツワナ国立博物館の努力、そしてスウェーデンが継続させたことが現在につながっている。

ボツワナではダイヤモンドなどの鉱物資源が発見され、他のアフリカ諸国とは対照的に急速な経済発展を遂げていると述べた。この資金力を背景にした政府の教育を最優先する国策は、例えば、2001年度の国家予算のおよそ4割を教育分野に割り当てており（ボツワナ共和国大使館 2004）、博物館は学校と並ぶ教育の中心と位置付けられている。「シマウマ号」の年間予算として、政府から日本円で約200万円（90,000プラ）が支出されており、博物館長と教育担当者は、十分な予算配分と回答している。アフリカ諸国では外国からの助成金が打ち切られると破綻してしまうプロジェクトが多いが、この自国政府の国家的教育事業という方策が成功の鍵になっている。

移動博物館プロジェクトとして、博物館は専任職員を確保し、人数も最低限の3名に抑制している。また、ボツワナにおける教室宿泊は、時間の有効活用と運用経費の節減に役立った。ケニアの場合、忙しい日常業務の合間の地方出張となり、時間的・人材的・経済的な課題が発生していた。しかし、実施国での法律や国民性を調査しないと、学校を管理する文部省などからの許可、調理用ガスコンロなど火器に関する消防法の問題もあり、どこの国でも実践できるとは限らない。

ボツワナの「シマウマ号」の対象は、田舎の小学生を中心に行っているが、学校周辺の村民までも視野に入れたことである。人々の愛するシマウマで親しみと博物館への関心を持たせ、国民に対して平等に生涯学習の場を提供する姿勢を保持している。植民地時代の圧政下で発生した民族間の相違を強調するのではなく、それぞれの生活習慣を尊重し合うという側面が見られる。また、西欧文化の流入により、アフリカの伝統文化が危機に瀕しているが、各民族がお互



---

いの文化的価値を認め、ボツワナ国民の民族多様性を誇るという任務も果たしている。

## 7. 「シマウマ号」への助言とアフリカの博物館の課題

ボツワナ国立博物館はアフリカ屈指の経済的に豊かな環境下にあり、大規模な移動博物館活動を展開している。今後は対象者を現在の小学生から中学生に拡大し、ボツワナの遺跡を学習する文化遺産保護プログラムを計画中である。ボツワナでは、国情に即したプログラムを考案したが、将来における改善策を提言したい。視聴覚教育の専門家の新規採用と外部養成が緊急課題になっている。1993年、日本からの文化無償援助により、ビデオ編集機材や撮影機材を保有しているが、1名の視聴覚担当者では、それらを有効活用するのは不可能である。また、授業のマンネリ化が見受けられるため、博物館教育の最新情報を入手すること、ワークショップなどにおける相互研修の必要性がある。教員には授業の補足資料を配布し、評価票も郵送してもらっているが、現在のところ事後調査に関する報告書が見当たらない。訪問する学校数の増加だけでなく、活動内容の改善が重要だと考える。

最後に、アフリカの博物館の現状について述べる。ボツワナでの研修後、ケニアの博物館職員から、専用車両以外の問題点として、車両維持費や運用経費の課題が提起された。アウトリーチ効果を訴えながらも、政府と博物館からの予算の裏付けが不可欠になるからである。ケニア国立博物館は、短期間であれば博物館車両を借り受けることが可能であり、2泊か3泊程度のアウトリーチは断続的に実施できる。ケニアは「人類の発祥地」として、進化の研究分野では世界的に有名であり、進化の謎を解明する初期人類の化石は、ケニアの国家遺産であると同時に、全世界の文化遺産でもある。特に、人類化石を紹介するアウトリーチ活動は、ケニアの子供たちと国民に対する博物館の使命といえる。アフリカ諸国の財政事情は厳しいため、教育や文化の支援を申し出る外国政府や国際機関には、一時的な自己満足で終わらない持続的な援助を望む。これらの課題を克服したのがボツワナであり、この事例のように息の長い草の根レベルでのプログラムが多数出現する日を待ちわびている。

## 参考文献

- 近藤雅樹 2000 『『みんなく移動博物館』を実施して』民博通信第88号 国立民族学博物館pp. 68-78.  
福井勝義・赤阪賢・大塚和夫 1999 「アフリカの民族と社会」世界の歴史24 中央公論社  
ボツワナ共和国大使館 「場所・気候・動植物・歴史・言語・文化・発展を支えるダイヤモンド」  
<http://www.embassy-avenue.jp/bots/index-j.html> (2004年5月検索)  
ポーム・D、川田順三訳 1993 「アフリカの民族と文化」文庫クセジュ 白水社  
Bauman C. 1998 *Mobile Museum Service, Report*, Unpublished, National Museums, Monument and Art Gallery of Botswana.  
Hooper-Greenhill E. 1991 *Museum and Gallery Education*, Leicester University Press, London and Washington.

---

Martin D. 1996 "Outreach by museum and galleries". *Museum Practice*, 1 (3), pp.36-76.

Nias C. and Nias P. 1996. "Namibia's Mobile Museum Service". *Museum International (UNESCO, Paris)*, 92 (48), pp. 45-48.

Timothy A. and Paine C. 1993. *Museum Basics*, Routledge, New York.